

## キリスト教音楽研究所主催 オルガン関連企画行事の記録

～2000年度から2009年度～

音楽学部 演奏学科教授

宮本 とも子

Tomoko A. MIYAMOTO

### はじめに

フェリス女学院は2010年に創立140周年を迎える。これを遡る1990年には、120周年記念事業として、山手のフェリスホールにオルガンが設置された。このオルガンは、当プロジェクトのために多大なる寄付を寄せられ、現在は故人となられたフェリス女学院 石井千明 元理事長のお名前を冠して《石井記念オルガン》と命名された。

このオルガン建造プロジェクトを遂行するにあたり、当時のオルガン設置委員会はフェリス女学院の卒業生で米国ボストンのニューイングランド音楽院オルガン科主任教授 林 佑子氏をアドバイザーとして任命した。オルガン設置委員会と林教授は、プロテスタントの信仰によって建てられたフェリスには、J.S.バッハ Johann Sebastian Bach(1685-1750)のオルガン作品に焦点をあわせた楽器がふさわしいと合意し、「オルガンの黄金時代」とも呼ばれるこの「18世紀北ドイツ様式」のオルガン建造法に明るい建造会社の選定が始まった。その結果、米国ヴァージニア州に工房を置く、テイラー&ブーディー・オルガンビルダーズ(Taylor and Boody Organbuilders)が選ばれた。

オルガンにとって設置される場所そのものが楽器の一部になるため、フェリスホールの場合、林教授の推奨により、建物の設計段階から建築家とオルガンビルダーとが円滑なコミュニケーションを取りあえたことはとても幸運なことであった。フェリスホールに誕生したこの本格的な「18世紀北ドイツ様式」のオルガンは、後に、世界の名だたるオルガンを記録した「オルガン年表」(Timeline of the Organ 2600 Years of History: The Westfield Center, 1995. ISBN 0-9616755-6-x)に記載されるようになるほどの「歴史的」な出来事であった。

フェリス女学院大学では、1989年に音楽短期大学から4年制音楽学部への移行が行われ、前述の林 佑子教授はボストンから本学音楽学部の初代教授会メンバーとしてフェリスに招聘され、1995

年3月まで教授を務められた。このオルガン建造プロジェクトは、「キリスト教」による学院の「建学の精神」と長年の祈りを具現化するものとして、フェリス女学院大学に新しく始まった4年制音楽学部のカリキュラムにも大きな関わりをもってきた。

オルガンは楽器の起源をたどると2600年もの歴史を誇り、時代、地域によってその規模や様式はかなり異なる。しかしながら、電気が発明された「つい最近」までは「人力で」一定の風圧を保って風を起し続け、その風を①「風箱」に溜め、②「複数の笛」の中から任意の音程のどの笛に風を送るかを指示する③「鍵盤」をもつ、という基本的な3要素と構造とは長年に亘って大きな変化なく受け継がれている楽器である。教会の中にオルガンが造られ続けて久しいが、オルガンの響きはいつも「公」の場所で人々の賛美の歌声とともにあった、と言っても過言ではないだろう。モーターが発明されるまで、オルガンから音を出すためには、必ず、「ふいご手」を雇わなければならなかった。それでは、オルガニスト達は、家庭なり修道院なり、自室での「私」的空間ではどのような音楽体験を持っていたのであろうか？ 1998年にケンブリッジ大学 (Cambridge University Press) から出版された『クラヴィコード』*The Clavichord* (ISBN0 521 63067 3)の著者 B.ブラウシュリ (Bernard Brauchli) の研究によると、音楽家の私的空間には800年近くもクラヴィコードが用いられていたのだ。

本学音楽学部では学部開設時に、18世紀北ドイツ様式に基づき、人力「足送風装置」を備えたオルガンを扱うだけでなく、クラヴィコードの教育を始めた。このことは、1970年代にバロック期の演奏様式研究において「最先端の街」ボストンでのさまざまな検証結果に基づいた決断だった。教育の枠組みの中で、永年にわたり教会音楽の「公」的部分を担ってきたオルガンと「私」的部分を担ってきたクラヴィコードとが「ごく普通のこととして」補完しあう取り組みは欧米にも先駆けたことであつた。そして、フェリスでの現代ピアノとそれ以外のクラヴィコード、チェンバロ、オルガンなどの鍵盤楽器が横断的に学べる教育の試みは、鍵盤楽器間の「見えない意識の壁」を知らず知らずの内に取り払うことに寄与してきた。このように、キリスト教文化の歴史的事実に即したオルガン教育へのアプローチは、西洋音楽発祥の地「横浜」に位置するフェリスに与えられた使命の一つであるのかもしれない。

「オルガン」という言葉に「刷りこまれたイメージ」は、個人個人の原体験によって限りなく広い幅を持つ。本学音楽学部では2004年度のカリキュラムまでは、全学部生に1年間のオルガン実技授業を卒業要件の必修科目として課してきたため、学生自らの専攻、所属学科を問わず、すべての学生がオルガン実技の学びを体験している。2005年度以降のカリキュラムでは、全音楽学部生に選択制のオルガン教育プログラムが始まり、学生ひとりひとりのニーズに応じて、オルガンを含めたすべての副科実技でも個人レッスンが受けられるようになった。同時に、二つの専攻を極められる道も整備された。フェリスの音楽学部に進んだ学生たちにとって、「オルガン」の原体験は「石井記念オルガン」であり、オルガンとは「非常に繊細で、音楽的に雄弁な楽器」なのである。

上記のような本学音楽学部の教育土壌の基礎を創られた林 佑子教授の後任として1995年4月か

ら重責を担うことになった筆者が、国内外で活躍されている4名のオルガン担当非常勤講師の方々と  
のチームワークを基軸として、提案し、実践することのできた2000年度から2009年度までのオル  
ガン関連企画行事の記録を以下に記したい。なお、「緑園校舎：緑園チャペル」との注記がないもの  
は、すべて山手校舎のフェリスホールで行われたものである。

## 2000年度

Johann Sebastian Bach (1685-1750) の生誕300年にあたる1985年から15年後の  
2000年はJ.S.バッハ 没後250年目ということで、再びバッハ研究が勢い付いた年であった。本学の  
オルガンがバッハの時代様式に基づいて建造されていることから、この年から年間5回シリーズのレ  
クチャー・コンサートを立ち上げた。

年間テーマは「オルガンの前に写るヨハン・ゼバスティアン・バッハの後ろ姿」。

- I 「バッハに見る音楽教育」 講演：小林 義武  
演奏：武久 源造 合唱：ハルモニア・インヴェントウール  
5月26日（金） 19:00~20:30
- II 「メンデルスゾーンとバッハ」 講演：小塩 節  
演奏：林 佑子  
6月16日（金） 19:00~20:30
- III 「バッハの作品に見る受難と復活」 講演：杉山 好  
演奏：宇内 千晴  
7月28日（金） 19:00~20:30
- IV 「バッハの即興・その正体は？」 講演とチェンバロ・指揮：武久 源造  
合唱：ハルモニア・インヴェントウール  
演奏：Jan Raas (オランダ ハーレム市で行われた国際オルガン・  
インプロヴィゼーション・コンクールに1975年から3年連続優勝・ユトレヒト音楽院教授)  
10月20日（金） 19:00~20:30
- V 「日本に紹介されたバッハ」 講演：秋岡 陽  
演奏：宮本 とも子  
11月24日（金） 19:00~20:30
- VI 「バッハが使った作曲の7つ道具」 講演：小林 義武  
演奏：三浦 はつみ  
2001年1月19日（金） 19:00~20:30

## 2001 年度

21 世紀を迎えたこの年は、「オルガンの響きとアカデミア各界の融合」と題して 21 世紀に大切にしていきたいことを各界からのレクチャーを伺いながらオルガン曲を聴いていただく 4 つの企画を立てた。

新世紀を迎えるということで、学問の世界も縦割りだけではなく横のつながりを持つべきであるということで「学際」ということがたびたび提唱されていたことを反映した。

### I 聖書

「書物としての聖書」講演：佐竹 明

オルガン演奏：宇内 千晴 テノール：蔵田 雅之

5 月 18 日（金）19:00~20:30

### II 人間関係

「少子高齢化社会の人間関係」講演：諸橋 泰樹

オルガン演奏：ジェイムス・ドーソン（本学キリスト教音楽研究所客員所員）

6 月 15 日（金）19:00~20:30

### III オルガン建造

「時代最高峰の知恵と技の結集」講演：フリッツ・ノアック（国際オルガン家協会会長）

オルガン演奏：河野 和夫（東洋英和中高教員）

10 月 19 日（金）19:00~20:30

### IV 聖書

「信仰の証言としての聖書」講演：佐竹 明

オルガン演奏：高橋 靖子

11 月 30 日（金）19:00~20:30

## 2002 年度

2002 年度の企画は、年間タイトルを「ヨハン・ゼバスティアン・バッハのクラヴィア作品の周辺」として、当時クラヴィアが鍵盤楽器の総称であったことを再確認しながら、サブタイトルを《あの村この町生涯の足跡をたずねて》として 6 回の企画を立てた。

この年度から、近隣にある横浜みなとみらいホールのオルガン紹介企画との協力が始まった。結果、夏にはホール招聘アーティスト 3 名にフェリスで演奏していただくことができた。

- I チェンバロ・オルガン・クラヴィコードを巡って  
 講演と演奏：武久 源造 バロック・ヴァイオリン：桐山 建志  
 6月6日（木）19:00~20:30
- II ケーテンのクラヴィアと弦の響きを巡って  
 講演と演奏：早島 万紀子 バロック・ヴァイオリン：桐山 建志  
 7月11日（木）19:00~20:30
- III 山手の丘にバッハの響きをもとめて  
 <横浜みなとみらいホール「オルガン天国」協力企画>  
 演奏：Tisiana Fanelli, Marc Fitze, Emmanuel Le Divellec  
 8月23日（金）19:00~20:30
- IV ライプチッヒのバッハの像を巡って  
 講演と演奏：三浦 はつみ  
 10月3日（木）19:00~20:30
- V ヴァイマルのコラール作品を巡って  
 講演と演奏：今井 奈緒子  
 11月7日（木）19:00~20:30
- VI クリスマスの季節を祝って  
 講演と演奏：新山 恵理  
 12月5日（木）19:00~20:30

## 2003 年度

2003年度は“ Memento mori” 「常に死を覚えつつ」ストレスの多い現代にあって、体と心の健康を保つことをテーマにした。「現代とバッハ」と題し、医者とオルガニストからのメッセージ《からだの健康、心の健康》と称して5回のシリーズを企画した。その内の1回、夏休みには、中高生を対象とした横浜みなとみらいホールとの協力企画も行われた。

- I 睡眠の秘密 講演：三村 圭美  
 演奏：三浦はつみ  
 7月23日（土）13:30~15:45
- II 生き物の動きに学ぶロボットの秘密 講演：太田祐介  
 <中高生のために 横浜みなとみらいホール 特別協力企画>  
 演奏：宇内 千晴  
 8月21日（木）13:30~15:45

III からだの不思議、「気」の秘密 講演：野辺地 篤郎

演奏：宮本 とも子

9月13日(土) 13:30~15:45

IV 楕円形の生き方「戯れと真面目」の秘密 講演：山内 慶太

演奏：武久 源造

10月18日(土) 13:30~15:45

V 美しい顔を創る命の結晶の秘密 講演：山本 一宏

演奏：ジェームズ・ドーソン

2004年度

2004年度は、6回の企画を立てたが、8月にオルガンの仕組みについてパワーポイントを使った説明を行った以外は各回とも演奏会形式の催しとした。

I 「22世紀に引き継ぐオルガンの魅力」

演奏：宮本 とも子 《18世紀J.S.バッハ《ファンタジーとフーガ ト短調》BWV542, 19世紀 J.F.メンデルスゾーン《ソナタ》作品65 第6番、20世紀H.ディストラーク《オルガン・ソナタ》作品18/II、21世紀K.コーン《グランド・ファンタジー》(2002) の作品を演奏》

6月18日(金) 19:00~20:30

II 「ルネッサンスの鍵盤曲：喜怒哀楽を音に聴く」

演奏：武久 源造 《W.バードとヒメネスの《戦争》、ブクスハイム・オルガン曲集と E.R.ヴァージナル曲集より《優しき夜ウグイス》、J.ブル《王の狩》などを演奏》

7月16日(金) 19:00~20:30

III 「山手の丘のオルガン：オルガンの仕組みについてのお話と演奏」

お話：濱田 南海(2.) 演奏：初垣 佳子(3.6.)、渋澤 久美(1.4.5.)《1.A.ヴィヴァルディ/J.S.バッハ《協奏曲 イ短調》BWV593 2. オルガンについてのお話 オルガン紹介パワーポイント企画制作：本学音楽学部宮本研究室 3. J.S.バッハ《トッカータとフーガ ニ短調》BWV565 4. J.S.バッハ《目覚めよと呼ぶ声が聞こえ》 5. J.S.バッハ《フーガ ト短調》BWV578 6. J.G.ラインベルガー《オルガン・ソナタ イ短調》作品98が演奏された》

8月6日(金) 19:00~20:30

IV 「J.S.バッハのオルガン作品に聴くアンサンブル」

演奏：三浦 はつみ 《コラール《いと高き神にのみ栄光あれ》にもとづく2声、3声、4声の作品、《天にまします我らの父よ》に基づく5声の作品を取り上げ、オルガン演奏におけるアンサンブルの要素を分かりやすく演奏。プログラムの最初には、コラール変奏曲《恵み深きイエスよ、よ

くぞ来ませり》BWV768 を、最後には《前奏曲とフーガ ホ短調》BWV544 を演奏。》

10月15日(金)

V 「オルガンの黄金時代：17,18世紀北ドイツオルガン音楽の夕べ」

演奏：高橋 靖子 《J.プレトリウス(1586-1651)、J.P.スウェーリンク(1562-1621)、D.ブクステフーデ(1637-1707)、J.A.ラインケン(1623-1722)、V. リューベック(1656-1740)の作品を演奏。教育的配慮から、当日使用したレジストレーションを全て記載しプログラム・ノートとして配布された。》

11月19日(金) 19:00~20:30

VI 「石井記念オルガン設置15周年演奏会：ヨハン・ゼバスティアン・バッハの夕べ」

演奏：林 佑子《筆者はふいご手をつとめ、プログラム全曲が足踏み送風で演奏された。《幻想曲ハ短調》BWV562, 《オルガン曲 Piece d'Orgue 》BWV572, 《いと高きところには神にのみ栄光あれ》BWV662, 663, 《装いせよ、おお、魂よ》 BWV654, 《パッサカリア ハ短調》BWV 582 が演奏された》

2005年3月18日(金) 19:00~20:15

## 2005年度

2005年度は全学的にアムネスティ・インターナショナル国際キャンペーンに参加し、Stop Violence Against Women ストップ!女性への暴力~女性に対する暴力をなくすフェリスからのメッセージ~が繰り広げられた年であった。

これを受けて、2005年度オルガン企画の最終回はこの Stop VAW!エンディングイベントも兼ねることにした。

I 「J.S.バッハのエネルギー<自由作品の多様性に味わう>」

演奏：岡本 桃子 《《ソナタ 第2番》 BWV 526, 《トッカータ ハ長調》BWV564, 《汝の御座の前にわれは今進み出て》 BWV668, 《平均律クラヴィーア曲集 第2巻》より《前奏曲とフーガ》IX番 BWV 878, 《前奏曲とフーガ ホ短調》BWV548 が演奏された》

6月23日(木) 19:00~20:30

II 「ヘブル語の響き・オルガンの響き<オルガンと会衆賛美>」

演奏：宇内 千晴 朗読：梅本 直人 《オルガン前奏に引き続き、詩編103編、130編、イザヤ書9:1-6、同53:1-10、マタイの福音書28:1-10、使徒言行録2:1-4,同17-21,マタイの福音書25:1-13,同26:26-30, エレミヤ書1:5, 詩編136編26節がヘブル語で朗読され、それぞれの内容に呼応した賛美歌の会衆賛美またはソロ・オルガンによるコラル前奏曲の演奏が応答した。なお、朗読された箇所はプログラムに日本語で印刷。演奏曲目はJ.パッヘルベル《トッカータ ホ

短調》J.S.バッハ/F.リスト《ふかき淵よりわれは呼ばわれり》BWV38、J.S.バッハ《来たれ、異教徒の救い主よ》BWV559、《我心より憧れ求む》BWV727、《今日、神の子は凱旋したもう》BWV630、《輝かしき日はあらわれぬ》BWV629、《フーガ IX ホ長調》BWV878、《目覚めよと呼ぶ声が聞こえ》BWV645、《装いせよ、おお愛する魂よ》BWV654、S.カーク＝エラート《すべてのものよ神に感謝せよ》作品 65-59》

7月14日（木）19:00~20:30

### III 「オルガンに踊る」～へだたりは ひびきあうために～

“横浜みなとみらいホール夏休みオルガンわくわく大作戦” 協力企画

演奏：原田 靖子 ダンス：新井 英夫 《16世紀のスペインとイギリスの曲、1968年生まれの作曲家レジス・カンポの《響き》2002、と《夜》を演奏。それに合わせて、ダンスが即興的に始まった。原田氏いわく、「新井英夫さんのダンスはからだの内側と、これら、からだの境界線外の世界とが、隔たりを越えて響き合うことから」生まれ、「ちょうどオルガンのパイプに風がぬけて美しい音を発し、再びまわりのものをふるわせ、響かせていくことのできる、しなやかで軽やかな、風の通り道に」似ているという。オルガンが歴史的にも、「永らく祈りの場であって、永遠と一瞬、彼方と此方、死者と生者の結び目にその音を響かせて」きたので、「隔たりあうもの同士をつなぐパイプ役」をそして「響き合うはずの二つの世界をオルガンとダンスに」託された。プログラム後半では、空のペットボトルを使って、こどもたちに、パイプオルガンの音の出るしくみを体験してもらった。最後には、《へいのあるいへ》というコンセプトを表した曲での即興演奏に合わせた即興ダンスで締めくくられた。》

8月5日（金）19:00~20:30

### IV 「ムージカ・ブリタニカ」＜オルガンとクワイアの響き＞

演奏：三浦はつみ（オルガン・聖歌隊指揮）宇内千晴（聖歌隊指導）

桐山建志（ヴァイオリン）、今江奈緒子（ソプラノ）山形明子（ソプラノ）

聖歌隊（オルガン専攻学生）《英国の夕の祈りをイメージしたプログラムの流れ

の中で、賛歌は原語で歌われた。1.オルガン・ソロ T.トムキンズの《ファンシー》、2. 聖歌隊による詩編18編、3. 会衆聖歌《この日も暮れけり》、4. 《おとめマリアの頌》、5.オルガン・ソロ T.トムキンズ 《ヴォランタリー》、6. 聖歌隊 《あめつちにみちみちる》、7.ソプラノ、ヴァイオリン、オルガンによる H.パーセル 《夕の賛歌》、8.G.F.ヘンデル《ヴァイオリン・ソナタ イ長調》、9.オルガン・ソロ H.ハウエルズ《タリス氏の遺言》、10.D.ロード《汝のまたき愛よ、わが胸の内に迫り来れ》ソプラノ2名とオルガン、11. P.ハーフォード《聖霊への連祈》、12.会衆賛美《日くれてよもは暗く》、13.R.ヴォーン・ウィリアムス《ラヴリー：くちぬ糧と》なお、英語賛歌の日本語訳は、林 信孝氏に依頼しプログラムに印刷して配った》

10月13日（木）19:00~20:30



V 「ブラームスによるバッハ受容」＜オルガン作品を例に＞

講演：遠藤 れな（横浜市芸術文化振興財団、横浜みなとみらいホール企画室勤務）

演奏：岡本 桃子《1. ブラームスとオルガン 2. シューマン夫妻の影響 【演奏】《ブラームス フーガ変イ短調 WoO8》3. フィリップ・シュピッタとブラームスとの往復書簡 【演奏】ブラームス《おお悲しみよ、おお心の痛みよ》によるコラール前奏曲とフーガ WoO7 4. ブラームスが演奏したバッハ作品 【演奏】J.S.バッハ《トッカータとフーガ へ長調》BWV540 よりトッカータ 5. ブラームスの《11 のコラール前奏曲》について 【演奏】ブラームス《11 のコラール前奏曲》Op.122 posth.より第 1,2,6,10,11 曲（備項：1~5 はレクチャー）》

2005年11月17日 19:00~20:30

VI 「J.S.バッハの調和と癒しの世界」～3種類の鍵盤楽器で味わう～

演奏：堀 由紀子（ピアノ）、武久源造（チェンバロ）、宮本とも子（オルガン）

《全学的な Stop! VAW の活動に音楽学部の教員はどのように参加できるのか、と考えたときに、千葉県館山市に深津文雄、春子夫妻が創設されたコロニー「かにた婦人の村」こそが、日本での Stop! VAW の活動だったのだ、と記憶を新たにした。婦人たちは知的障がいのある元慰安婦たちで、深津夫妻は酪農、農作業を婦人たちとともに担いながら自立できる生活空間を創られ、その中心に礼拝堂を建造された。そこに小さなパイプオルガンを入れられ、筆者はその奉献演奏を担当。30年ほども前のことだった。深津牧師の「バッハの音楽には心を癒す力があるから」という言葉を思い出し、この企画を立て、J.S.バッハのクラヴィア・ユーブングのI巻の《パルティータ》をピアノで、II巻の《イタリア趣味に基づくコンチェルト》をチェンバロで、そしてIII巻から《前奏曲とフーガ 変ホ長調》BWV552、その間に抜粋コラール前奏曲をオルガンで演奏した。》

2006年3月21日（火）14:00~16:00

2006年度

昨年度最終回にピアノの教員とともに演奏できたことが貴重な体験であったので、2006年度は、ピアノの教員とオルガンの教員によるコラボレーション演奏会を企画した。初回の6月には、横浜みなとみらいホールは、1\$コンサートが100回を迎えたことを記念して、近隣のオルガン鑑賞見学のためのバス・ツアーを仕立てた。横浜みなとみらいホールの月例1\$コンサートでは、オルガンを、しいて言えば、そのキリスト教文化をも横浜市民に幅広く紹介する役割を果たしているが、フェリスのオルガン担当教員もその内の複数回を担当してきた。フェリスホールに到着したバス・ツアー客は、オルガンと学部の弦楽アンサンブルとの共演を鑑賞、終了後にフェリスホールのオルガンを見学された。その後、今度は、横浜みなとみらいホールで本学の非常勤講師武久源造、桐山 建志デュオ・コンサートが開かれ、バス・ツアーはみなとみらいへと戻った。このよ

うな、交流の積み重ねで、大学とコンサート・ホールとの連携が一つずつ築かれていく、ということを実感した。

今年度から、コンサートの時間を昼休みの1時間とし、演奏曲目についての短いお話を益山典子非常勤講師に担当いただいた。II回目からV回目まではメイン・タイトルを「ピアノとオルガン コンサート」とした。

### I 「オルガンと弦楽アンサンブルで味わうひととき」～横浜みなとみらいホール 1\$ コンサート第100回記念協力企画～

指揮：飯吉 高 オルガン：岡本桃子 フェリス女学院大学弦楽アンサンブル

《弦楽アンサンブルとの W.A.モーツァルト《教会ソナタ へ長調》KV244 と G.F.ヘンデル《オルガンとオーケストラのための協奏曲 変ロ長調》Op.7-1、オルガン・ソロでは J.S.バッハ《パッサカリア ハ短調》BWV582 が演奏された。》

6月28日 16:00~17:00

### II 「シューマンの作品をピアノとオルガンで味わうひととき」

ピアノ：落合 敦 オルガン：三浦 はつみ お話：益山 典子

《シューマンはペダル・ピアノでオルガンのための練習をし、そのための作品も残している。作曲家に対して、その作品の出来具合を、そして演奏家に対しては、読譜力を「容赦なく試される楽器」として、シューマンはオルガンの「教育効果」を高く評価していた作曲家である。ピアノでは《ウィーンの謝肉祭の道化》 作品 26、

オルガンでは、《カノン形式による6つの作品》 作品 56 より第3番 ホ長調、《ペダル・ピアノのためのスケッチ》 作品 58 より 第1番ハ短調、第4番変ニ長調、《バッハの名前による6つのフーガ》 作品 60 より 第2番変ロ長調、第1番変ロ長調が演奏された。》

9月29日（金）12:30~13:30

### III 「モーツァルトの作品をピアノとオルガンで味わうひととき」

ピアノ：堀 由紀子 お話：益山 典子

オルガン：岡本 桃子(ソロ)、宮本とも子(イタリア・オルガン)、

伊勢えみい・小清水桃子(オルガン・デュオ)

《モーツァルト生誕250年を記念し、オルガン・ソロでは、《自動オルガンのためのアンダンテ へ長調》K.616、《ジューグ ト長調》K.574を、ピアノでは《アレグレットの主題による12の変奏曲 変ロ長調》K.500と 《ロンド イ短調》K.511を、イタリア・オルガンでは《グラスハーモニカのためのアダージョ ハ長調》K.356(617a)を、連弾で《自動オルガンのための幻想曲 へ短調》K.608を演奏した。》

10月27日（金）18:30~19:30 緑園校舎 緑園チャペル

#### IV 「ブラームスの作品をピアノとオルガンで味わうひととき」

ピアノ：黒川 浩 オルガンとピアノ連弾：宇内 千晴 お話：益山 典子

《ヨハネス・ブラームスの作品より、《ピアノ連弾でワルツ集》作品 39 より、第 1、第 2、第 4、第 15 番、ピアノで《晩年のピアノ小品》を、オルガンの伴奏で《ピアノ・コンチェルト 第 1 番 ニ短調》作品 15 より 第 2 楽章：アダージョ、オルガンで《11 のコラール前奏曲》作品 122 より《装いせよ、愛する魂よ》、《ばらは咲き出でたり》、《おお世よ、われ汝よりさらねばならぬ》が演奏された。》

11月17日(金) 12:30~13:30

#### V 「ショスタコーヴィッチ生誕 100 年、ガルツピ生誕 300 年を記念して」

ピアノ・オルガン・チェンバロ・お話：武久 源造

《D.ショスタコーヴィッチ 《24 のプレリュードとフーガより 第 1 番》、《パッサカリア》Op.29 より、L.v.ベートーヴェン《自動オルガンのための 5 つの小品》より、《7 つのバガテル》Op.33 より、B.ガルツピ 《チェンバロのためのソナタ ニ長調》、J.S.バッハ=武久源造 《シャコンヌ》、J.S.バッハ《来たれ、異邦人の救い主よ》BWV 659 を演奏》

### 2007 年度

今年度から、このシリーズの名前をフェリス女学院大学音楽学部教員が贈る

【金曜お昼「山手の丘コンサート」at フェリスホール】と刷新。4 回の演奏会と夏のオルガン体験プログラム「はじめて弾くオルガン」を中高生とピアニストのために、緑園チャペルでは教会オルガニストのためのオルガン講習会を開催した。

今までに、声楽とピアノの教員がたのご協力をいただいたので、今年度はフルートとヴァイオリンとの共演を企画した。

#### I 「オルガンの響きでめぐる教会暦」

オルガン：宇内千晴 ヴァイオリン：桐山建志 オルガン・ソロ：三浦はつみ

《待降節、降誕節、受難節、復活日、聖霊降臨日、再び待降節(再臨)、それぞれの聖書箇所を朗読し、J.S.バッハの《来たれ異教徒の救い主よ》BWV659、J.G.ラインベルガー(1837-1911：ドイツ)の「ヴァイオリンとオルガンのための」《パストラーレ》Op.150 と《テーマとヴァリエーション》Op.150、A.ハイラー(1923-1979：オーストリア)の《見よ、十字架を》、N.de グリニー(1672-1703：フランス)の《来たれ聖霊、造り主よ》より“クロモルヌのレシ”、“グランジュの対話”が演奏された。なお、聖書朗読は本学大学院音楽研究科声楽専攻の 2 名前田佳代、山形明子が担当した。

7月6日(金) 12:30-13:30

## II 「フルートとオルガンの響き」

フルート：千葉 純子（闘病中の西澤幸彦氏と交代）オルガン：宮本とも子

お話・朗読：益山典子 《プログラムはオルガンのソロで J.S.バッハの《いと高き神にのみ栄光あれ》BWV715(4声体)、BWV 711(2声体)、BWV676(3声体)、次に、本年逝去された筆者・演奏者の恩師であり作曲家 D.ピンカム(1923-2006)を記念して、フルートとオルガンのための《奇跡》1.カナの奇跡 2.湖上の奇跡 3.ベトザダの奇跡 4.ゲラサ人の地の奇跡 5.路傍における奇跡 全曲をそれぞれの聖書箇所が朗読された後に演奏。プログラム最後には塚本一美(1963-)《殖ゆ光〜ソロ・フルートのために〜》が初演された。》

9月28日(金) 12:30-13:30

## III 「鍵盤楽器即興の響き」

ピアノ、ポジティブ・オルガン：三宅榛名 オルガン、チェンバロ：武久源造

フェリスホールのバルコニーからオルガンの即興演奏 Part1 が響き始めると、決めごとがあったかのようにステージのピアノがその音楽に自然に加わり、音楽が勢い帯びてきた。曲の盛り上がり、曲の終わりも空間的には、オルガンとピアノとの間に挟まれた聴衆が即興演奏の醍醐味を堪能。2.バルコニーのオルガン独奏で《ラ・ミ・レの上で》というルネッサンスの作曲家不詳の作品がはじまり、徐々に武久源造の作品へと移っていく。3.ピアノ独奏で W.A.モーツァルトの《幻想曲ニ短調》K.397 が演奏される。4.バルコニーからステージに移動した武久源造によるポジティブ・オルガンのソロで W.A.モーツァルトの《自動オルガンのためのアンダンテ へ長調》が演奏される。5.作曲者自身のピアノ独奏で《鳥の影》(1984)が演奏された。6.プログラム最後はステージ上に並べられた、ピアノ、チェンバロ、ポジティブ・オルガンを演奏者二人が場所を変えながら、即興演奏デュオ Part2 を繰り広げた。》

10月19日(金) 12:30-13:30

## IV 「ヴァイオリンとオルガンの響き」

ヴァイオリン：名倉淑子 オルガン：岡本桃子 お話：益山典子

《J.G.ラインベルガー-Joseph Gabriel Rheinberger (1839-1901)の《ヴァイオリンとオルガンのための6つの曲》から“序曲”作品150、C.フランク César Franck (1822-1890)の《ソナタ イ長調》より レシタティーヴォ ファンタジア”、ヴァイオリン・ソロで S.プロコフィエフ Sergey Prokofiev (1891-1953)の《無伴奏ヴァイオリン・ソナタ ニ長調》作品115より“アンダンテ・ドルチェ”、C.フランク《祈り》作品20、最後に J.G.ラインベルガーの《組曲 ハ短調》作品166より“プレリュード”が演奏された。》

11月16日(金) 12:30~13:30

## 2008年

2008年度の試みは、音楽と祈りを結びつけるためにはどうしたらよいか、また、音楽物語をオルガンで演奏してオルガンの可能性をなお一層広めることを趣旨とし、4回の企画を起こした。

### I「カテキズム・コラールの内容を理解して音楽と祈りを結びつけるために」

聖書朗読：林 めぐみ 講演：藤原 一弘 演奏：宮本とも子（クラヴィコード・オルガン）《J.S. バッハのクラヴィア・ユーブング III 巻に納められている手鍵盤用コラール作品を、個々の内容に関するにレクチャー、聖書朗読、クラヴィコードによる演奏、という順番で全11曲を巡った。

最後に、オルガンで全曲を通して演奏した。当日朗読した聖書箇所と演奏曲目は以下の通りである。

聖書：キリエ！永遠の父なる神よ！詩編 69 編 14,17-18：《永遠なる、父なる神よ、あわれみたまえ》BWV672,《世のすべての慰めなるキリスト》BWV673,《聖霊なる神よ、憐れみたまえ》BWV674

聖書：いと高きところには神にのみ栄光あれ ルカ 2:8-14 《高きにいます神にのみ栄光あれ》BWV675,《高きにいます神にのみ栄光あれ》BWV677

聖書：これぞ聖なる十戒 ルカ 10:25-28 《これは聖なる十戒なり》BWV679

聖書：われらはみな一なる神を信ず ローマ 10:8-15 《われらはみなひとりの神を信ず》BWV681

聖書：天にまします われらの父よ マタイ 6:5-15 《天にいますわれらの父よ》BWV683

聖書：われらの主キリスト、ヨルダンの川に来たれり 詩編 51:3-6; ローマ 6:1-4

《われらの主キリスト、ヨルダン川に来たれり》BWV685

聖書：深き悩みの淵より、われ汝に呼ばわる 詩編：130:1-8

《われは深きふちより、汝に呼ばわる》BWV687

聖書：我らの救い主なるイエス・キリストは コリント II:23-28

《われらの救い主、イエスキリスト》BWV689 以上、終了後にオルガンで11曲をオルガンで演奏。

なお、コラール前奏曲の邦語訳は《共同訳聖書》と微妙にことなる。今後の考察課題であろう。

6月28日（土）14:00~16:00 緑園校舎 チャペル

### II「ピーターとおおかみ」朗読と演奏

朗読：平松英子 オルガン連弾：三浦はつみ・谷口朋子《オルガンの可能性を常に模索し、学生たちにも体験してもらうように努めているが、今回はオルガンの連弾、朗読、映像によってセルゲイ・プロコフィエフ作曲《ピーターとおおかみ》を企画した。いろいろな登場人物に合わせて巧みに声色が変化する朗読者、ホールの前面いっばいに広がるスクリーンの映像、バルコニーからのオルガンの迫力が圧巻であった。》

10月13日（月曜日・祝日）12:30~13:30

### III「ヘンデルとメンデルスゾーンからの贈り物」

バリトン：土屋広次郎 オルガン：宇内千晴《2009年には生誕200年を迎えるフェリクス・メンデルスゾーン＝バルトロディ Felix Mendelssohn-Bartholdy(1809-1847)のオラトリオ《エリア》よ

り“ アブラハムの主なる神”、アリオーゾ“ 山は移り、丘は動くとも” オルガン伴奏で歌われ、オルガン・ソロでは《ソナタ》第3番 イ長調が演奏された。ゲオルク・フリードリヒ・ヘンデル Georg Friedrich Haendel(1685-1759)のカンタータ《エジプトのイスラエル人》よりアリオーゾ、《泣かせたまえ》が歌われ、その他 H.パーセルの詩編 100 編に基づくオルガン曲などが演奏された。最後には、会衆と一緒に山田耕筰作曲の《赤とんぼ》がオルガンの伴奏で歌われた。》

11月24日(月曜日・祝日)12:30~13:30

#### IV「クリスマスを祝いましょう」

朗読・映像：藤本朝巳 テノール：蔵田雅之 オルガン：宮本とも子

重唱：柿本有衣、柏木晶子、川寄香織、阿部圭生、岡田彩

ポジティブ・オルガン：澤田真美 《絵本の映像をフェリスホールの正面スクリーンに大きく写しながら、聖書のクリスマス物語に基づいたオリジナル・テキストを朗読。その流れに合わせてながら、バルコニーのオルガンとステージに立つ重唱クワイアの響きとポジティブ・オルガンの響きが交互に賛美を繰り返す。プログラムでは、オルガンが J.S.バッハの《パストラール》へ長調の全楽章を曲想にあった場所で演奏、テノールは P.ヒンデミットの《マリアの誕生》と J.S.バッハの《わがこころは主をあがめ》BWV648 をオルガン伴奏で歌った。クワイアは B.ブリテンの《キャロルの祭典》から“ Procession” と “Wolcum Yole!”、讃美歌 21 より、《あら野のはてに》、《世のならぬさきに》、《まきびとひつじを》、《今こそ声あげ》、《みどりもふかき》を歌った。最後に英語で《Deck the hall》とテノールのソロとともに A.アダムの《O Holy night》を歌った。》

12月23日(火・祝日)12:30~13:30

### 2009 年度

2009 年度からは、キリスト教音楽研究所の所管が生涯学習課から演奏委員会室に移管し、さまざまな業務の仕切り直しの時期ということで、オルガン関連行事は 2008 年度にプログラム構成を創りあげた文学学部とのコラボレーション、「クリスマスをお祝い」に限られた。

#### I「クリスマスを祝いましょう！」

映像・テキスト：藤本 朝巳 朗読：本学英文学科学生 テノール：蔵田雅之

オルガン：飯沼 彩 ポジティブ・オルガン：澤田真美

重唱：岡田彩、柿本有衣、柏木晶子、衣笠千恵子、高橋仙香、松崎夏美

《テノールとオルガンで J.S.バッハ《主よ、人の望みの喜びよ》BWV147 が歌われ、オルガンのソロでは、J.S.バッハ《いざ来ませ、異邦人の救い主よ》BWV599 《パストラール》BWV590 より 1 楽章、《高き天よりわれは来たれり》BWV700、M.デュリュフレ《公現祭のためのプレリュード》が演奏された。重唱のクワイアは B.ブリテン《キャロルの祭典》より “Wolcum Yole!” と “Hodie”、オルガン伴奏で C.フランク《天使の糧》を歌いそのほかは讃美歌《荒野のはてに》、《O come all ye

faithful》、《God rest you merry》、《世のならぬ先に》、《まきびとひつじを》、《In dulci jubilo》、《みどりもふかき》、《Deck the hall》、《O Holy night》を歌い、最後に、会衆一同とともに《きよしこのよる》が歌われた。》

12月23日（水・休日）12:30~13:30

おわりに

フェリスホールオルガンの中にはフェリス女学院大学に集う全学生数に近い2871本の笛が収まっている。オルガンが大きな音を出している時でも、そのすぐ近くには、自分の出番のない笛たちも、オルガンケースの中で一緒に響き合っている。外から良く見え、背丈にして5メートルほどの、「大きく目立つ」笛もあれば、オルガンケースの奥に住まう小指の先ほどの「小さく目立たない」笛もある。笛の大きさにかかわらず、ましてや、その出番の頻度にかかわらず、どの「一本の笛」も等しく大切な存在である。そして、どんなに小さな笛に不具合が起こってもオルガン全体が機能しなくなるので、オルガニストは立ち止まってその笛を探してケアすることになる。

「無縁社会」とも呼ばれる、好ましくない社会状況の中に学生たちを送り出さなくてはならない2010年の3月。これからも、このオルガンとともに発信し続けなくてはならない「み言葉」のメッセージがまだまだ限りなくあるように感じるのは筆者だけであろうか。

もともとオルガンは一人で演奏できる楽器ではなかったが、今でも、フェリスホールオルガンは、電気に頼らずに、「友情をたよりに」人力で演奏することができる。オルガンの後ろには、この楽器の製作にかかわったすべてのビルダーのサインがある。冒頭には、「Soli Deo Gloria」と書かれており、「我々の手による楽器が、唯一の神を賛美する器になりますように」という祈りが込められている。楽器をどの角度から眺めても、何人ものビルダーが丁寧に、手作業で仕上げたことがわかり、たっぷり時間をかけた伝統の「匠の技」からなる「作品集合体」こそが「オルガン」であると気付く。

スイスに現存し、現役で働くオルガンの中には700年以上も経過している楽器がある。フェリスホールオルガンには、控えめに見積もって、あと300年の寿命があるとすれば、このオルガンを守っていくための長期計画や修繕基金の設立が急務であろう。教育機関は単年度予算で動いているが、単年度予算を毎年「積み立てる」ことができる受け皿、フェリスに集う有志が遺言の中にオルガンを覚えない時の受け皿、山手の丘の賛美を今後数世紀に亘ってサポートしていくことができる受け皿、として「オルガン基金」の誕生を是非提唱したい。言うまでもなく、オルガンが「ゆうに生きる」であろう300年間の間には、建物の建て替えも必要になってくるはずである。今から準備を始めたい。

この10年間の企画を応援いただきキリスト教音楽研究所運営委員の先生方、共催として支えてくださった生涯学習課の方々、企画に参加し、講演や演奏を担当してくださった先生方、オルガン調律のために早朝から手伝いに来てくれたり、オルガンの後ろで孤独に耐えながらも「ふいご踏み」に挑戦したり、オルガン・レジストレーションのアシスタントを務めたり、入口の受付に笑顔で立つなど、

さまざまな仕事を快く担当してくれた歴代の学生たち。今思い返すと、誰一人の力が欠けていてもこのオルガン企画は実現しなかったことが鮮明に思い返される。これらお一人お一人に心から感謝を捧げつつ、今回の活動記録を閉じる。



